

信仰とあたらしい文化交流の場 ミナミの情緒あふれる落語「まめだ」

作家の五木寛之に『宗教都市・大阪 前衛都市・京都』（講談社）という都市論があるが、大阪の歴史は盛り場においてさえ、どこかしら信仰と結びついている。キタなら飲食店街の真ん中にお初天神（露天神社）、ミナミなら法善寺の水掛け不動があるし、アメリカ村の御津八幡宮、心齋橋筋の三津寺もそうだ。

三津寺は、真言宗御室派の準別格本山で、中央区心齋橋筋2丁目にある。天平16(744)年、難波宮に遷都された聖武天皇の勅命で高僧の行基(668~749)が建立したと伝わる。以来千年以上の歳月を経て、近代では、昭和8(1933)年、御堂筋の拡張工事で境内の半分近くが接収された時に鉄筋コンクリートの庫裏が建てられ、切られた大きなクスノキを彫刻して本尊の十一面観音像(秘仏)が開眼されている。

御堂筋に面したコンクリートの庫裏をご記憶の方も多いと思うが、時代の流れで三津寺に大きな変化がおきている。昨年9月、老朽化した庫裏を建てかえ、本堂を覆うようにその上にホテルなど商業施設が入った地上15階建てのビルがオープンした。木造の本堂は新しい建築の1階にそのままの形で保存され、香煙の絶えることがないの言うまでもない。本堂は大きなガラスで御堂筋からも見え、入りやすくなっている。



新しいビルの1階にある本堂

全面改修にあたって、お寺では『ME~御津と三津寺のこれまでとこれから~』(LLCインセクツ発行)を刊行した。仏の教えや仏像など文化財の写真が掲載されるほか、地域の人たちにも取材したおしゃれな冊子で、巻頭に加賀哲郎名誉住職が、仏の世界、地域文化、自分の心の三つに触れることの重要性を述べておられる。

お寺のすぐ東の心齋橋筋2丁目の商店街は、戦前から大阪の文化芸術の拠点的な施設が集まっていたところである。京都から高島屋(現難波)が大阪に進出して最初に店舗を出したのもここであり、美術作品を展示販売する高島屋美術部がここで創設されている。隣にあった丹平製薬の「丹平ハウス」には、赤松麟作の洋画研究所や前衛写真で知られた丹平写真倶楽部が活動の拠点を置いた。三津

寺筋を西に入ったところには、小説家・武田麟太郎の行きつけのカフェである「カスターリヤ」もあった。そんな歴史のある地域である心齋橋筋が、三津寺の改修で文化拠点として再び盛り上がればと思う。

また、これまで気づかなかった本堂の天井画が、工事の過程で知られるようになった(表紙)。現地は堂内が暗くて見えにくい、升目状になった格天井に多種多様な花をモチーフとした「花卉図」が描かれている。寺院の天井に花を描くことは、江戸時代の伊藤若冲が描いた京都・信行寺天井画をはじめ各地に現存しているが、大阪のこんな繁華な街中に残されていることは気づかなかった。改修工事では、京都市立芸術大学日本画専攻の正垣雅子准教授と大学院生のみなさんが、再現や模写などで天井画保存に協力されている。

もう一つ三津寺といえば、落語の演目「まめだ」である。昭和41(1966)年に三田純市さんが書き下ろした新作落語の名作で、桂米朝師匠が演じられた。道頓堀に近い場所柄、歌舞伎役者と豆狸(まめだ)が登場する哀愁溢れる物語である。昨年11月号の本欄で、落語のストーリーを実像化した「落語碑」の建立を提案したが、三津寺は「まめだ」の碑である。

三津寺はそのまま読むと「みつてら」だが、松屋町が「まっちゃまち」となるがごとく、地元では音が詰まって「みつてら」と発音する。むかし上岡龍太郎・笑福亭鶴瓶の人気番組「パパポテレビ」(読売テレビ)で上岡さんが、フランス大統領ミッテランと三津寺筋をかけたボケを返されていたが、今回のタイトルも、街の繁栄を願って人があつまる意味で、みつてらにみんなヨッテラ、としてみました。



境内で焚かれる護摩法要の様子

筆者プロフィール 橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学名誉教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室(現・大阪中之島美術館)から大阪大学総合学術博物館に移った。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人―「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ―増殖するマンモス/モダン都市の現像―」(創元社)など。